

〔漆工展によせて〕

唐草文の生えるところ

ー朝鮮半島の螺鈿の系譜を求めてー

本展覧会では、大和文華館が所蔵する東洋の漆工芸から名品を展示し、また高麗～朝鮮王朝時代の螺鈿作品により特集展示を行います。特集展示では館蔵の「螺鈿菊唐草文小箱」とともに、「螺鈿牡丹唐草文経箱」（重要文化財、北村美術館蔵）や個人蔵の「菊唐草文箱」を含め、6点の作品を特別出陳いたします。

高麗時代から朝鮮王朝時代の転換期にあたる螺鈿漆器については、現存数が少ないことや製作年代の明らかな基準作が現在のところないことから、展開の様相を明らかにし難い状況にあります。今回の特集展示では、高麗時代の螺鈿経箱とはやや異なる性質を持つ作品を展示し、この時期の様相を再考する手掛かりを得られないか考えようとする内容です。本稿では、主文様に配されるようになる起点の形と位置に注目します。

高麗時代の螺鈿に見られる特徴として、玳瑁を用いた伏せ彩色や経箱に見られるような定型的な文様構成がありますが、また、菊唐草文を細密に施すことが挙げられます。これらは菊の花弁が一枚ずつ、また葉が一枚ずつ一片の貝片に切り抜かれて鈿装されています。菊唐草文を主文様とした経箱では、文様に特に一つの起点（始点）を定めることなく、横位に波状に展開される菊唐草文で画面が充填されています。東京国立博物館所蔵の螺鈿経箱（毛利家

伝来）は主文様が菊唐草文ではなく菊花の単位文が並べられる点で異なりますが、この作品の蓋側面には菊唐草文が認められ、さらにその間には一ヶ所を起点として左右に茎を伸ばす牡丹文があらわされています。

菊唐草文を主文様とした東京国立博物館所蔵の螺鈿経箱（大道寺家旧蔵）や徳川美術館所蔵などの経箱、また大倉集古館所蔵の螺鈿箱では菊唐草文は横位に隙間なく並べられ、周縁の文様帯には牡丹唐草文がやはり横方向に帯状に展開されています。

牡丹唐草文を主文様とした北村美術館所蔵の螺鈿経箱（展覧案内右下に写真掲載）でも、主文様となった牡丹唐草文は地面から伸びる植物文としてではなく、横位に展開される文様として画面を埋め尽くしています。

ところが、転換期の作例と考えられている東京国立博物館所蔵の螺鈿盤（図1、部分）では、稜花形の盤に起点が示され、そこから左右に枝分かれする牡丹唐草文があらわされるようになります。稜花形の枠の中に枝状に伸びる牡丹があらわされる図案は、象嵌青磁（図2、韓国国立中央博物館所蔵）が関連するものとして、また元時代の鎗金経箱が稜花形枠の類似するものとして早くから指摘されています。また象嵌青磁より製作年代が上がる青磁透彫唐草文箱（12世紀前半、東京国立博物館所蔵）でも同様の図案が認められ

ます。高麗青磁と螺鈿の図案は類似していますが、青磁では牡丹の枝がより自然に伸びているのに対し、螺鈿盤では渦巻き状の枝がつながり、唐草文の変形であることがうかがえます。本展覧会に出陳される個人蔵の机2点では、方形の天板上面の文様に、稜花形枠の中に牡丹唐草文が一起点から枝分かれて伸びる文様が認められます（図3）。

これらの螺鈿作品では、起点部分に勾玉状の形の貝片が配される点で共通します。この形状は花卉や葉の形とは異なり、何をあらわすのかは定かではありませんが、3作品の形状は良く似ています。青磁では枝は稜花形枠の線から直接伸びており、このような起点部分は螺鈿の特徴と考えられます。これらの作品では、起点は枠内の下部中央に配置され、牡丹文は枝分かれながら展開されますが、花を支える枝は渦巻きを連ねた唐草文を継承しています。

唐草文の起点は、多重の花弁を持つ菊文を配した唐草文の作品にも見出すことができます。展示作品中の螺鈿盆（個人蔵）は方形の画面全面に菊唐草文が均一に配されていますが、蔓線は中央を起点として左右に伸びていく構成が取られ、起点部分には勾玉の丸い頭が変形したような形状の貝片が置かれています（図4、部分）。蔓は高麗螺鈿の特徴である金属線ではなく、細く切り出した貝の線が用いられ、文様には形式化が認めら

れます。同じく多重の花弁を持つ菊唐草文が蓋上に施された円形合子（東京国立博物館所蔵）では、中央の花から伸びる蔓に、不明瞭ながらも、起点が置かれた痕のような部分が認められます。多重花卉型の菊唐草文では、その中央に起点が置かれ、唐草文は左右対称に規則正しく枝分かれして、枠内に均一に拡がっています。

牡丹唐草文で起点としての役割を持っていた勾玉状の形は、画面に規則的に唐草文が充填される多重花卉型の菊唐草文でも起点としての役割を留め、文様の中央に配置されているのではないかと考えられます。このように考えることができるのであれば、これら二つの系統の文様間につながりが見えてきます。そして起点の有無や形式が、唐草文の展開を考える視点の一つとなるのではないかと考えられます。

起点部分の貝片は牡丹にのつての苗や根をあらわしているのではないかと想像されます。朝鮮時代の工芸品には大らかで強い生命力を感じさせる植物や動物の文様が多く見られますが、生命力の象徴ともいえる根元が唐草文にあらわされているのでしょうか。

（図1は『高麗李朝の螺鈿』毎日新聞社、1986年、図2は『新羅・高麗美術』講談社、より写真を使わせていただきました。

瀧 朝子）

図1 部分図

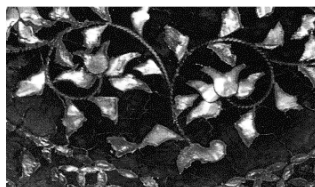


図2 青磁象嵌牡丹文板



図3 螺鈿牡丹唐草文机

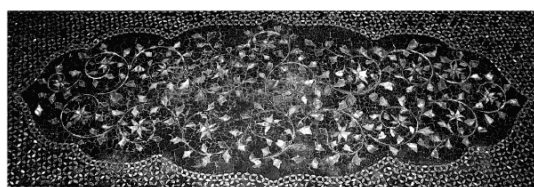
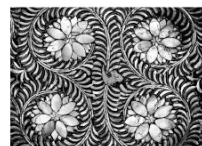


図4 部分図



季刊 美のたより No.175

平成23年8月2日

発行 大和文華館